
魔法少女リリカルなのはStrikerS ～ 紅蓮の騎士伝説 ～

A I R S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers～紅蓮の騎士伝説～

【Nコード】

N0341BA

【作者名】

AIRS

【あらすじ】

世界を救った紅蓮の騎士が姿を消してはや4年、世界は平和なときを謳歌していた。しかしあるときその平和を脅かすものは音もなく忍び寄っていた……………そして、彼もまたその姿を現そうとしていた。そしてその危機に、彼らはどう立ち向かっていくのか……………魔法少女リリカルなのはStrikers～紅蓮の騎士物語～の続編です。ストーリーやキャラクターなどは魔法少女リリカルなのはStrikers～紅蓮の騎士物語のほうをご覧ください。

エピソード0「騎士の帰還」(前書き)

新章始まりました!!

と言ってもまだまだですが……………

前作より気合を入れて書いていきたいと思しますのでどうぞよろしく
お願いします!!
それではどうぞ!

エピソード0「騎士の帰還」

ミッドチルダ暦0080年。

紅蓮の騎士が姿を消して早4年、世界はきわめて平和な時を見せていた。

しかしその平和に暗雲が忍び寄ってきていることに、誰も気が付かないのであった……………

レナ side

季節は12月、あの人がいなくなった日から4年の歳月が流れた。そしてこの4年で色々なことが起きた。

まずは私たちイージスのメンバーから。私たちはそのままイージスの部隊員として働いており、イージスの規模は少数精鋭ではなく特殊部隊として正式に採用となった。これもみんなあの人のおかげだろうと、私は思う。イージスの部隊は、私、ガルシア、ルーク、それぞれが部隊を持つ3隊に分かれている。構成としてはガルシアの

隊が先人を務める切り込み隊、ルークの隊が後方支援及び精密射撃による敵掃討隊、そして私の隊は全体を指揮しつつ状況を判断し、足りないところのフォローに回る隊。そしてこの役は、以前ならあの人がやっていたこと……………おっと、いけないわね。

次に機動六課のメンバーの動向。ほとんどのメンバーは望んでいた方面の仕事に就いているらしい。らしいと言うのは、実は私自身イージスの部隊長になってしまい多忙な日々を送っているため、このごろ連絡があまり取れていない。

まあ、みんなそれぞれに頑張っていると思うのだけど……………

「……………い……………おい！おいレナ！！」

「ッ！？な、何？」

声をかけてきたのはガルシアだった。

思えば、彼もこの4年で変わったような気がする。前よりバ力でなくなっただけか……………普通になっただけか？

「おい、今失礼なこと思わなかったか？」

「いいえ別に、何も思わなかったわよ。あなたが馬鹿でなくなった、

なんて」

「……………そうか。それと、お前も少しは休めよ。このごろボーっとしてる事が多いからな、体調とか崩すんじゃないぞ」

ぶっきらぼうにそう言つと、ガルシアは行ってしまった。全く、あなたに言われるまでも無いわよ。

でも、この季節になると思い出すのよね。どうしても……………あのひと彼
のことを

光司さん

今、あなたはどこにいますか……………

レナ side out

ガルシア side

俺はあいつと分かれてからイージスの隊舎の廊下を1人歩いていた。
(やっぱあいつ、また思い出してんだろうな……………)

俺が考え事をしていると、目の前に突然1人の男が現れる。こんな
現れ方をするやつは1人……………

「久しぶりだな、ルーク。相変わらずの登場の仕方で、どうやら元
気そうだな」

「それはどうも。そう言うガルシアは考え事をしてたようだけど、
熱でもあるのかな。それにしても久しぶりだね…………… 2ヶ月ぶり
ぐらいかな？」

「いいや、2カ月と2週間ぶりだ」

「相変わらず、“あの時”から時間には正確になったよね」

「当たり前だろ、俺達は約束したんだ。あいつに、“絶対帰って来
いよな！！”ってな。だからあの時から時間にはどうも厳しくなっ

てな」

「そうだったね……………そう言えば、もうすぐまる4年になるのか……………光司^{あいつ}がいなくなってから」

「そうか、それでレナも……………」

しまった、気づくべきだった。どうもこういうのは分からねえ……………
あいつなら、分かってやれたはずだよな……………

光司^{アイツ}がいなくなってから、隊長はレナに変わった。まあ俺もルークもそうだった柄じゃなかったし、何よりレナたつての希望だったからな……………けど、思えばずっと無理してたのかも知れないな……………

俺はそんなことを思いつつルークと共に廊下を歩いていった。

すると俺の隊のヤツが何人かやって来た。急いでるようだが何かあったのだろうか？

「聞きましたよ隊長！！また昇進の件を断ったそうですね！！」

「これで何回目なんですか！？隊長なら相応しいですって」

何だそんなことだったのか、下らねえ……………

近頃任務をこなすすぎてか昇進の話が多々ある。最初のうちは“自分にはまだ早い”と断ってきたが、最近じゃ段々通じなくなってきた。まったく、俺にはもう地位なんてものは必要ないのにな

「またその話か、俺には必要ないもんだ。諦めろって上に伝えてくれ」

「そ、そんな!?!」

「しかし、隊長はどうしてそこまで断るんですか?何かあるんですか?」

不思議に思った2人は俺に理由を聞いてきた。そう言う詮索をするより、戦闘訓練でもしろってんだ……………だがそう言えば、こいつらにまだ言ってなかったな。

「お前らには言ってなかったか。俺が今の“二等空佐”に拘る理由は」

「是非聞きたいです!」

「お願いします!」

目を輝かせながら聞いていた……………男がすると似合わねえな。まあこうくるだろうと思ってはいたんだがな。

「はあ……………嫌なこった」

「『そんな〜!!』」

俺はブーブー言う2人を放っておいて次の任務へと向かった。こいつらの相手をしてると疲れすぎてしょうがねえ、話すのが面倒だしな。

ただ、話さなかった理由は

あまり……………かつこいい理由じゃねえからな。

ガルシア side out

三人称 side

ガルシアが任務へと向かったため、ここには部隊の2人とルークだけが残った。

2人は先程から文句ばかり言っていた。

「あゝあ、隊長も素直に教えてくれたら良いのになゝ」

「そうだなゝ」

「いや、それは無いよ」

「『ルーク隊長?』」

「彼は、きっと……………誰にもこの事を知られたくないんだと思うよ。僕以外にはね」

ルークの言葉に驚きを隠せない二人。それはそうだろう、なにせ理由を知っているのが彼1人だけなのだから。

「と言う事は、ルーク隊長は知ってるんですか、例の理由!?!」

「知ってるよ。だけどこれは教えられ無い、こればかりはね……………」

……………それじゃあ僕も任務があるから」

そついい終えると、ルークは2人の前から姿を消した。
2人は呆気に取りられていたがすぐに持ち場へと戻っていった。

“ガルシアがこれ以上昇進したがない理由”それは局でも噂になる程だった。あれほどの人材がなぜ今の位置にとどまってるのか、それは誰にも分からなかった。

ガルシアは常に困難な任務に挑み、常に成功してきた。したがって一等空佐に昇進してもおかしくない人材だった、だが彼は頑なにそれを拒んだ。

1度、ルークが不思議に思いガルシアにその事を話した事があった。

《ねえガルシア、どうして昇進しないのさ？何か理由でもあるの？》

《ん？……………その事が……………実はな……………》

《……………なるほど、そう言うことだったの……………》

《ああ……………それと、この事は他言無用にしてくれ。あんまり知られたくねえんだ》

《分かった。ガルシアがそうしたいって言うならそうするよ》

《ありがとう……………相棒》

《どういたしまして……………》

ガルシアが昇進しない理由、それは

《俺はあの時心に誓ったんだ“俺はライバルとして、仲間として、そして友として、^{アイツ}光司の帰りを待つ。そして帰ってきたら、あいつの下でもうあんな事が起きないように^{アイツ}光司を支えてやる”ってな。だから、支える人間が支えられる側の人間より上の立場にいてどうするんだよって事だ。これが、今の“二等空佐”に拘る理由だ》

ガルシアはもちろん、レナやルーク、元機動六課のメンバーは誰よりも彼の帰還を願っていた。

そして今宵、クリスマスにはちょっと早い^{よろい}が紅い衣を纏った者がここに降り立つ事になるのだった。

三人称 s i d e o u t

ガルシア s i d e

俺は任務のためとある星に来ていた。ここは見渡すかぎり荒野の何もない星、植物もいなければ原生生物もない。

俺は、そこそこ簡単な任務のため1人で十分だと思い部下は連れてこなかった。

「ふう……………これで終わったか。思ったより面倒だったな」

《Certainly……………Let's return
early（確かな……………それでは早いとこ帰るとしよう）
》

「賛成だ」

任務を終えた俺がとつと帰ろうとしたその時だ、急に俺の相棒にバルバトロス反応があった。

どうやらそれは魔力反応でクラスはAAA以上のものらしい。

「……………バル、念のため準備だけはしておけ……………」

《All right（了解だ）》

俺はリリース状態だった相棒をサイズフォームにし、静かにそいつが来るのを待った。この場は無人の星のため、その場を静けさだけ

が支配した……………

恐怖はない、いつも通りにいける……………

その日の俺はいつになく落ち着きがなかった。さつきから、なんだか妙な胸騒ぎがしていたためだった。

「……………来る!」

そういった途端、目の前に顔を覆うような甲冑をかぶり体はマントで覆われた人物が姿を見せ、その風貌はどこと無く騎士を想像させるものだった。

そして、アイツ光司に似ていた……………

俺は一瞬そうかと思ったが、頭の甲冑の色が暗い青色なのを見てすぐに違うと分かった。

そして何より、そいつの放っている覇気が尋常でないことは明らかだった。

「…………お前…………何者だ？」

「……………」

そいつは黙ったまま1つも動かなかった。現れた時から下のほうを向いている。

顔も甲冑に隠れて見えねえし……………面倒くせえな。

「とりあえず、頭の甲冑を取って話を聞こうか、ええ？」

「……………」

そいつは黙って頷くと、ゆっくりと手を頭にあて甲冑を取った。そしてそいつの素顔が明らかになると、俺は目を疑った。

パツと見ると女性と見間違えるくらいの顔立ち、前髪を若干分け後ろは肩を越すぐらいの長い髪を結んでいる。色が少し暗い青みを帯びてはいたが、その顔は紛れも無く“アイツ”の顔だった。

「なっ……！………こっ………じ？」

そっ、そこにいたのは“神谷光司” そっくりなヤツだった。

ガルシア side out

三人称 side

「なっ!!.....こう.....じ?」

「.....」

ガルシアの問いに答える事も無くその人物は黙ってガルシアの方を見ているだけであった。

その視線は、ただまっすぐに彼を見つめていた。
ガルシア

「おい!!.....お前は本当に何者なんだ!? その似すぎてる顔
.....何なんだ!!」

「.....」

ガルシアは声を荒げながらその人物に言った。そして、ほとんど黙
っていたその人物が口を開いた。

「貴様は.....強いのか?」

「はあ!? こつちが先に質問してんだからこつちの『強いのかと聞
いている.....』ッ!?!」

ガルシアはその人物の覇気に圧倒されたがすぐに元に戻った。

(アイツの覇気.....下手したら光司より.....)

そんな不安がよぎるガルシアに更にその人物は詰め寄っていった。

「まあ.....お前くらいのヤツは言わなくても分かるがな.....
.....ッ!!--!」

「くッ!!--!」

“ガキイン”と甲高い弾くような音と共にガルシアは2メートルほど後ろに移動していた。そしてその人物の手には銀色と青色を基調としたカラーリングの剣が握られていた。

そして皮肉にもその形は“ザックス”のブレイドフォームに酷似していた。

「おい……………お前……………どうなつてやがる……………」

ガルシアは混乱していた。見た目、デバイス、そのどちらともが光司とそっくり——彼と対面していると言つても過言ではないくらいだった。

頭では今この人物が光司本人であるはずが無いのは分かっている……しかし、体が言う事をきかない。今、闘うべきなのかそうでないのか……………

「なんだ……………こんなものだったのか？かの有名な黒衣の豪騎士、イージス・ナイトオブ2、ガルシア・C・バイゼン二等空佐？」

「ッ！？……………よく知ってるじゃねえか……………お前やつぱりあいつじゃねえな？」

「知れた事……………そうだな、カオス ソルジャー混沌の騎士とでも言っておこう」

「はっ！……………急にしゃべりやがって……………いいぜ、相手をしてやらあー！！！」

そして意を決してガルシアはその騎士に肉薄していった。

だがガルシアは光司では無いとわかったものの、その心に若干の戸惑いを抱えながら向かっていくのだった。

「おらああああっ！！！」

ガルシアは渾身の一撃を繰り出すがカオスは紙一重のところで避けた。

その後もガルシアの攻撃は紙一重のところでは避けられ続ける。無論カオスが相当な強さの持ち主な事もあるが、今のガルシアはどうも調子が悪くいつもの半分の実力も出せずにいた。

（くそっ！！別人だと頭で分かってるんだがどうも闘いにくいな……………）

そう、カオスの顔は光司そのもの。ガルシアの体は無意識に力をセーブしてしまっていた。

「この程度か……………」

「うるせえよ……………　　ッたく面倒くさい相手だ……………」

「そうも言ってられなくなる……………　　今度は、こちらから行かせて貰うからな……………　　バルムンクー！」

カオスが剣を高く掲げると、剣は禍々しい色の煙に包まれしばらくすると形状が槍のようになっていた。

しかし今度は光司のランサーフォームのような槍ではなく、西洋の騎士が持つような円錐型の槍のようだった。

「これが俺のデバイス、バルムンクの真の姿だ……………　　いくぞ……………」

一瞬でガルシアの懐に入ったカオスは既に槍を突ける体勢になっていた。もちろんガルシアは咄嗟に反応して距離を取ろうとしたが

「終わりだ……………」

「ッ！？」

カオスの槍がガルシアの胸を貫……………

カァァン！！

かなかった。

ぎりぎりのところで槍はその向きを逸らしガルシアの頬に傷を付けた程度だった。

そしてその人物がゆつくりと姿を見せる……………

「まったく、なかなか戻らないから心配してきてみれば、危ないところだったねガルシア」

「……………ああ、助かったぜルーク。相変わらず正確無比なショットだな」

ガルシアの危機を救ったのはルークだった。彼はカオスの槍の側面を狙い見事に槍の起動を逸らしたのだった。

「さてと……………で、これはどういう状況かな？」

ルークはカオスを見て驚きながらも、平静を保ちつつそう言った。

「これは……………今度は雷鳴の銃射手、ガンマンイージス・ナイトオブ3、ルーク・C・シュツルム
執務官のおでましか」

「……………なるほど、ガルシアがてこずるわけだ。厄介な相手なようだね」

ため息混じりにそう言いつつ、ルークはガルシアの方に近寄った。

（大丈夫、ガルシア？）

（ああ、掠った程度だ。だがあの動き……………思った以上に早い）

（そっか……………で、近くで見てみてどうだった？）

（ヤツは確実に光司^{あいつ}じゃない……………だが）

（似すぎているから、どうも闘い辛い……………だね？）

（……………）

（まあ僕も同意見なんだけど……………これからどうしよう？）

（とにかく……………やるしかない……………そうだろ？）

（そう……………みたいだね）

そして、2人は再びカオスの方に顔を向けた。その顔は依然として光司のようで光司ではない顔をしていた。

「話は終わったか？死ぬ前の最後の話は？」

カオスは槍を構えながら2人に聞く。

その槍からは既に禍々しいオーラが出ていた。

緊迫する空気の中、突然ガルシアとルークのデバイスに反応があった。

《There is a magic reaction……
……However, this reaction……》
(魔力反応あり………けど、これは………)《》

「どうした！？」

「どんな反応！？」

突然の魔力反応に2人は思わず身構えた。カオスに仲間がいらないという保証はどこにも無い、もしかしたら更に敵が増える可能性もある。

そうならば更に厄介となる………だが、その必要は無かった。

《..... It understands soon.....
..... Especially, you understand
soon (..... すぐに分かる..... 特に、2人は)
》

デバイスたちがそう言うが、当然2人は意味が分からずにいた。いったいどういうことだろうか..... すぐに分かる、しかも自分達は特に。

ここで思い当たる人物はいる..... しかしこのタイミングで現れる事などまさに奇跡ではない。そう奇跡でしか.....

だが、奇跡は起こった。

「.....何か来る？」

カオスがそう呟くとカオスとガルシア達の間はさんでその人は現れた。カオスと同じような騎士甲冑、ただ違うのはその色が綺麗な紅いこと。その色は、紅蓮というにふさわしい色だった。

「.....何者だ？」

今度はカオスのほうが現れた人物に問う、がその人物は答えず振り返りガルシア達のほうに向かった。

「……………まさか……………とはね」

「ああ……………けど、いいんじゃないか」

どうやら2人もデバイスたちの言ったことが理解できたようだ。そしてその人物は2人の近くまで来た。

「おせえぞ……………あれから349864時間と、49分の遅刻だ」

「……………」

その人物は静かに兜を取った。その顔は女性と見間違えるくらいの顔、前髪を若干分け後ろは肩を越すぐらいの長髪、そして昔と変わらないその優しい眼差し、そう紛れも無く彼だった。誰もがその帰還を心待ちにしていた英雄……………

「……………待たせたね」

紅蓮の騎士、神谷光司だった。

三人称 side out

エピソード0「騎士の帰還」(後書き)

いきなり帰ってきましたけど………実はしばらく出番はないんです。

それはおいおいわかってくると思います。

それでは次回をお楽しみに!!

エピソード1「新たな出会い？」（前書き）

一応第2話です。といっても短いです!!

そして次回からは本編ではなく、1人のキャラクターに焦点を当てたオムニバスの話になります。

そして勘の良い方はもしかしたら展開が読めるかな………と思います。

それではどうぞ!!

エピソード1「新たな出会い？」

突然現れた謎の騎士・カオス、それと時を同じくして紅蓮の騎士・神谷光司。

そしてあまりにも似すぎているこの2人……………果たしてこの2人の騎士ナイトの間にいったい何があるというのだろうか……………

魔法少女リリカルなのは〜紅蓮の騎士伝説〜

始まります。

三人称 side

ついに紅蓮の騎士こと、神谷光司が4年ぶりに戻ってきた、が今は再会を喜んでいる場合ではないようで、すぐに光司はカオスの方に顔を向けた。

見ると向こうは以前と変わらなくこちらを睨んでいた。
そして光司も剣を抜き構えをとる。

「さて、聞きたいことは山ほどあるけど……………落ち着いて話

せる状況じゃないかな」

「……………お前は、いったい？」

カオスは不思議そうな顔で光司のほうを見る。同じ顔同士の光景なのでなかなかシニールだ。

「おかしいな……………あいつ、俺達のことはよく知っているみたいだったけどな」

「そうだね……………どうして光司のことは知らないのは分からないけど……………光司に関係している事は確かだね」

当然光司にもこの事は分からない。恐らく今の段階では誰一人として分からないだろう……………

「……………とりあえず、その事から聞いていこうかな」

そして3人はゆっくりとカオスに近づいていく。それに対し、カオスは後退りを始めた。

さすがにこの状況では勝ち目が無いと思ったのだろう。

「……………どうやら、今は分が悪いようだな。今回は退くが、次会ったときを楽しみにしている……………それも、近いうちに会っだろう……………騎士よ」

カオスは意味深な言葉を残しつつ、どす黒い煙がカオスを包むと共にカオスの姿は消えていた。
そしてそのどす黒い煙もいつの間にか消えうせてた。
カオスの殺気が完全に消えると同時に光司達はゆっくりと構えを解いた。

「……………いなくなっただみただな？」

「そう……………みたいだね……………」

「……………うん。ようやく一息付けるね。……………」

……………それにしても、本当に久しぶりだね2人とも！

「！」

「『おお（ああ）！！！！！！』」

緊張の糸が切れると同時に3人は肩を抱き合うほど喜んだ。2年ぶりの再会をかみ締めるかのように、しばらくの間肩を叩き合ったり光司の頬を引っ張ったりしていた。

「痛い痛い！！引っ張りすぎだよ！！」

「悪い悪い、何せ信じられなくなてな」

「そうそう……………やっと戻ってきてくれたね。早速レナに知らせないと」

しかしルークが通信を開こうとするのを光司はとめた。再会したいのお互いにそうなのに……………と、2人は不思議がった。

「どうしたの？何か不味い事でもあるの？」

「いや……………ちょっと色々と考えがあつてね……………」

「って言うത്？」

「まあ、僕に任せてよ……………」

そう言うと、光司は少し笑みを浮かべながら2人と一緒に転移装置へ向かうのだった。

所変わってここはイージスの隊舎。そしてこの部隊長、レナ・C・マリージュは坦々と仕事をこなしていた。

「……………ふう、これで一段落ね」

そしてコンソールを打つ手を休め深いため息をつく。
今日だけでため息を何度付いたことだろう、毎年クリスマスが近付いてくると日を重ねることにその数が多くなる。

「……………クリスマス、か……………」

ふとカレンダーに目を落としそう呟いてみるレナ。

4年経ったとは言え、やはり彼女の中で彼の存在は相当大きいものだった。

そんな彼女に突然通信が入る——ルークからだった。

「どうしたの？ガルシアの様子を見に行くにしては長かったようだけれど、何かあった？」

『まあ、色々だね……………それより、レナに会って欲しい人がいるんだ』

「え？」

この時レナはかなり不思議に思った。最近、確かに色々な人から人を紹介される……………人材の話もあれば見合いの話など様々だ。

だが、ルークから人を紹介される事は初めてだった。

『ほら、前に話した副官の話だよ。多分、もうすぐそっちに着くはずだからとりあえず会ってみて。それじゃあ』

「あつ、ちよつとルーク！」

勝手に話を進められ一方的に通信を切られたレナはどうすることも出来ずにいた。

（まあこうなつたら仕方がないわね。会っただけ会ってみるしかないわ）

レナは自分を納得させ、とりあえず会うことにした。

すると

「失礼します」

「はい、どうぞ」

部屋をノックして現れたのは銀色の短髪に赤と青のオッドアイが特徴の青年。

年齢は17歳くらいで身長はレナより少し高め、少し目付きがキツいのが惜しいが中々の美形だ。

「本日付けで、イージス・01部隊に配属になりました、キョウジ・天木・二等空尉であります」

「はじめまして、KNIGHT・OF・1、レナ・C・マリージュよ」

レナは軽い挨拶を交わし、キョウジをソファーに座らせた。

「部隊長、自分はシュツルム隊長からここに向かえと言われたのですが……………」

「あれ、ルーク隊長から何も聞かされていないの？あなたには、しばらくの間私の副官をしてもらうことになってるの」

「は、はぁ……………」

レナの言葉に最初キョウジは言葉を失った……………そしてしばらくして……………

「……………ええっ!?!」

驚きの声が部屋に響いた。

「じ、自分が部隊長の副官ですか!?!」

キョウジが驚くのも無理はない。イーゼスには無制限られた人間しか入隊できない、更に部隊長補佐となればエリート中のエリートと言っても過言ではない。

そんな役職にルークはキョウジを推薦したのだ。

「まあまだ決まったわけじゃないんだけど、しばらくの間様子を見てそれから正式に決めようと思っているわ。だから、ようはあなたの頑張り次第ね」

「……………な、なるほど……………分かりました。誠心誠意頑張らせていただきます！」

かくして、イーゼスにキョウジと言う新たな仲間が加わったのであった。

そしてこのキョウジの介入で物語は大きく変化することになる……………

……………

三人称 side out

エピソード1「新たな出会い？」（後書き）

ここで新たに登場したキョウジの詳細を載せておきます。
果たして彼の目的とは……………？

今後もお楽しみに！！

名前

キョウジ・天木

年齢

17

身長／体重

173 / 59

階級・所有ランク

二等空尉・A A

詳細

銀髪に短髪、更に青と赤のオッドアイが特徴の青年。ルークの紹介でイージスに入隊、及びレナの副官に就任することとなったが、その裏には何かあるようだ。

性格は普段は冷静沈着だが熱くなると周りが見えず突き進んでいくことも……。しゃべり方はいつでも固いしゃべり方。

アナザーエピソード1「レナ・C・マリージュ」(前書き)

ここからオムニバスの話になります!!

まずはレナからいって、ヒロインの分だけ進めていきます。

まあまだネタが全部決まっていませんが……………

それではどうぞ!!

アナザーエピソード1「レナ・C・マリージュ」

レナ side

突然にきた彼、キョウジ君が私の副官に就任して2週間がたった。彼は本当によくやってくれている……私の仕事の補佐は勿論、訓練や自分の仕事もきっちりこなしていた。この調子なら、私の副官よりも他の部隊の部隊長とかの方がふさわしいんじゃないかしら。

「……………よしっ、ようやく終わったわね」

「お疲れ様ですレナさん。お茶が入りましたよ。キョウジさんもうぞ」

「ありがとうございます」

仕事が一息ついてウーノさんが入れたお茶を飲みながら一息つく私たち。ちなみに言うと、ウーノさんもイーリスに勤務して、データ管理や事務的なお仕事更にはお茶も出してくれたりと色々お世話になっている。

すると私に通信がかかってきた。私の悪い予感が当たらないといいいんだけど……………

「何かしら？」

「部隊長、いつもの方からメッセージが来ておりますが……………」

「はぁ……………後で見えておくわ……………」

「し、承知しました……………」

（これで何回目かしら……………まったくあの人はしつこいと言つか諦めが悪いと言つか……………）

「あの、見なくてもいいのですか？」

「いいのよ。どうせ、あの人、だろうから……………」

最近になってある男の人から頻繁に連絡がかかってくるようになった。それは以前に紹介された大手の会社の御曹司の方で、交際を申し込まれたけれど何度もお断りしているのにその度に花束やら洋服やらブランドのバックやらを送ってきている。御曹司というのは何でもお金で解決できるものと思っているのかしら。

しかし、むこうも大手の会社の御曹司だから無下に断ると管理局の印象にかかわるし……………

でも私には……………

「なにか……………あるんですか？」

「え、ええ……………まあ……………」

「そう……………ですね……………」

興味深そうに聞く彼に私は答えを濁すことしかできなかった……………
……………彼のことを思い出して。

レナ side out

三人称 side

ここはイージスの本部前、ここに1人の男が立っていた。隣にはSPであるう2人の男も立っている。金髪の整った髪型に目にわかる

ほどの育ちのよさがわかる顔立ち、それに値段を聞いたとたん目玉が飛び出そうになる価格のスーツを身にまとっていた。この男こそレナに熱烈にアプローチしている男だ。

「レナさん……………仕事で忙しいなんて、そんな嘘でこの僕を騙そうだなんて、そうはいきませんよ」

「坊ちやま、そろそろ生きませんとマスコミが……………」

「お、そうか、人気者も困ったものだ。では愛しのレナさん……………待つててください！」

そう言う男はイージスの隊舎にむけ歩を進めていった。無論他の局員や隊員達も不思議そうにその男のほうを見ているが、男は気にも止めずまっすぐに受付嬢の方へ歩いた。

「あー君、レナ・C・マリージュという隊員に会いたいんだが？」

「部隊長ですね。ご用件はなんでしょうか？」

「ああ、サガミ・クリスフォードと言えば分かるさ」

「サガミ・クリスフォード……………？……………ってあのサガミ財閥の御曹司の！？し、少々お待ちください！」

受付嬢は男の名前を聞くと、驚いて部隊長に内線を繋ぐ。

それはそうだ、サガミ財閥は最近急成長した大企業、主にコンピュータ関連を手掛け、最近では医薬品などにもシェアを伸ばしているまさに時の企業だ。

その御曹子が会いに来たのだから驚かない方がどうかしている。

「……………サガミ様、部隊長は生憎お忙しく……………」『僕の言うことが、聞けないと言うのか？』い、いえ！で、では待合室にてお待ちください！」

御曹子特有の、自分の言うことが聞けないのか？、と言う身勝手な圧力によって受付嬢はやむ無く待合室へ通した。
サガミはそれを聞くとすぐさまスーツを翻し、その待合室へ急いでいった。

その一部始終を見ていた局員達も、何やら言い出せない気持ちとやるせない思いでそれを見送った。

待合室にて、サガミは今か今かと待ち続けた。それも椅子に立ったり座ったり、その辺りを歩いてみたり、鏡をしきりに気にして髪形やスーツを直してみたりと、デート前の待ち合わせのようだ。

そしてしばらくすると、その待ち人である、レナ、がやってきた。

「ああ！レナさん！お仕事が忙しいところ申し訳ありません！！ですが、どうしてもあなたにお会いしたくなってしまうこうして参上したしだいです」

「サガミさん……………何度も言うように、お見合いの件はお断りしたはずですよ！それに職場にまでこられますと……………こちらとしても困ります！」

「そんなこと言わずに、もう一度考えてみてください。僕と一緒になれば必ず貴女は幸せになれるんですから、こんな良い話はないでしょう！？」

そう、彼が熱烈にレナに会いに来ていたのはこのためだったのだ。サガミは以前パーティーの席でレナに会い、それから連絡を取ってくるようになった——いわゆる一目惚れだ。確かにレナは管理局でも噂になるほどの美人であり、また彼氏や恋人の話もない……………あるとすればそれは「彼」だけだ。だから彼女も彼と交際する気など毛頭無い。

「ですから、何度も申し上げているように！！『分かっていますよ、あなたのことは』ッ！？……………どうということ……………？」

「あなたは、今でも「彼」を待ち続けているようですね？あの紅蓮の騎士、神谷光司を」

「……………」

サガミの言葉にレナは言葉を失った。それはレナ自身が一番分かっている事実、そしてもう4年も経つというのに未だ行方不明、それどころか何一つ分かったことが無い。六課のみんなやガルシアやルークも信じて待ち続けているが希望は薄いことは皆薄々感じている。故にレナの心は揺らいでいた、このまま彼を待っても来ないのではないだろうか、新たに好きな人を見つけるべきではないだろうか、そんな衝動に駆られていた。

「レナさん、彼を待ち続けてもう何年になると言うのです？このまま待ち続けても、彼は来ないでしょう。それよりも、僕と結ばれて幸せになったほうが彼も浮かばれ」『そんな風に言わないで！』

……………おっと、これは失礼」

珍しくレナが大きな声を上げた。普段冷静な彼女が大きな声を出すのは珍しいことだ。それだけサガミの言葉は許せなかったのだろう。しかしそれだけ彼女の中で「彼」という存在は大きいのだ。

「分かりました、今日のところは引き上げましょう。ですが、僕は絶対に諦めませんから、彼にも負けなくらいあなたのこと好きですから」

とだけ言い残しサガミはその場から去っていった。レナはその場に

立ち尽くし、しばし動けなかったと言う……………

「光司さん、私……………」

レナは立ち尽くしたままそう呟いた、ただそう呟いた……………

所変わってここはイージスの隊舎屋上——「ここ
にレナはやってきた。無論先ほどのことを思いつめてだ。」

「はあ……………」

ため息をするたびにその白い息が冷たい空に現れては消え、現れては消えている。その度に寂しさでもない、虚しさでもない、そんな
気持ち彼女の心をよぎる。

そして冬の冷たい風が彼女の髪を靡かせ、彼女を包みその体をその心のように冷たくさせた。その姿はどこか寂しげだったが、その中に美しさもあつた。

そんな中……………

「ここにいらしたんですか部隊長」

「……………キョウジ……………君……………ごめんなさい……………なんでもないの」

「……………嘘、ですね」

キョウジはそれから黙ってレナの隣に立ち、自分のジャケットをそっとレナにかける。こと時レナは思い出した、‘彼’にも同じことをされたことを……………その優しさを、その暖かさを。

「シュツルム隊長から粗方聞きました。サガミさんの件で悩んでらっしゃるんですね？」

「……………」

レナは沈黙と言う名の肯定の意思をあらわした。そしてそれを確認するとキョウジは続けてレナに言う。

「決断をされるのは部隊長ですが……………これだけは忘れないでください。彼は、何があるかとあなたの幸せを願っていることを……………それでは、風邪を引かないうちにお入りになってください」

そついい残すとキョウジはレナに背を向け隊舎に戻っていった。その背中ではレナに欲にてどこか寂しげだった。

「私の、幸せ……………か……………」

そしてレナはまた1人、冬の空にそつと呟いてみるのだった。

三人称 s i d e o u t

ガルシア side

俺は任務を終え隊舎に戻ってくると隊員達がなにやら騒がしい様子だったので、その辺のやつをひっ捕まえて聞き出した。

「おい、何なんだこの騒ぎよつは？俺がいない間に何かあったのか？」

「あつ、隊長！じ、実は……………」

そいついわく、どうやらレナのやつに一目惚れしたどこかのボンボンが押しかけてきてそいつがもしかしたらあいつと結婚するかもしれないと言っ噂が持ちきりらしい。なるほどな……………って、それってまずくないか？

俺はひとまずルークに話を聞こうとあいつを探すことにした。

「おい、ルーっ『何か用？』……………まあいいか、例の話聞いたか？」

「うん……………まあ決めるのはレナ自身だけど……………あ、それとち

よつと気になることがあつて調べてみたんだ。あのサガミ財閥についてね……………色々と手を出しているみたいだね」

サガミ財閥については俺も調べていた。ここ最近急成長してとはいえ、この成長ぶりは明らかにおかしい。表向きは確かに真つ当な会社のようなが……………どうにも気になってしょうがない。未だに尻尾はつかめてないが、おそらく時間の問題だろうと思うが……………
…っ　とそれよりもだ。

「で、そのことをあいつは知っているのか？」

「一応言っておいたけど……………どうにもできないんじゃないかな。何せ……………」

確かに、あいつが今出て行ったらそれこそスキャンダルだからな、迂闊に動けないってわけか……………これは俺たちで何とかするしかないな。そう思いルークに視線を合わせると、あいつも分かっていたように頷いた。

こいつは、また忙しくなるかな。

ガルシア side out

三人称 side

数日後、サガミは逆にレナに呼び出されてしまった。不思議に思いつつも、これはもしかしたらもしかするかもしれないと意気揚々とその場所に向かった。その場所とは、あの神谷光司が決戦の地に行ったあの場所。そこにはあの転送装置と神谷光司のモニュメントがたっていた。そんな場所にレナはサガミを呼び出したのだ、もちろん人気のない時間に。

「どうしたんですか、こんな時間に呼び出して？ やっと嬉しい答えが聞けそうで何よりですよ」

「ええ、やっと私も自分に正直になれたわ。もう、自分の心に迷わない」

レナは数日前とは打って変わってしつかりとした目でそう答えた。もう心に迷いはなくいつものように凜とした彼女がそこにいた。だからこそ、この男も彼女に一目惚れしたのだろう。

「ではその迷いない心で出した答えを聞きましょうか」

「……………答えは……………Noよ!」

きつぱりとレナが言うと、しばし時が流れた……………

「……………ええええええええええ!!??」

サガミは今までに出したこのないほどの驚きの声を上げた。いくら人気のないといえど、これでは誰かが気づいてしまいそうだ。そしてさらに顎が外れてしまいそうなほど口をあんぐりとあけ、その場へへたり込んだ。見事に振られてしまったと言っわけだ。

「そういうわけだから、また別にの人を見つけてくださる？」

「……………や……………だ……………」

「っえ……………?」

「いやだ……………いやだ……………いやだいやだいやだいやだいやだいやだ!」

断れたと急に現実から逃げようとするかのように何度も否定するサ

ガミ。もはやそこには大会社の御曹司ではなく、ただの聞き分けのない子供がいるようだった。だが子供と違い、彼はここで終わるようなそんなことはなかったのだった。

「どうしてなんだ！？僕と結婚すれば、あなたは幸せになれるはずなのに！！」そう、その幸せを決めるのはあなたじゃない、私よ」
「ッ！……………ああそうかい、だったらこっちにも考えがある！！」

そう言うと、どこからともなく黒いスーツに身を包んだ男たちが数人現れた。サガミはこんなこともあるのかと、SPを待機させていたのだ。勿論、正当な理由ではなく……………そして、SP達はレナの周りを囲むように立ちその冷酷な表情をレナに向けていた。

「……………これはどういうことかしら？」

「あなたが悪いんですよ、あなたが素直に僕の言うことを聞いてくれているればこんな手段には行きたくなかったんですが……………やれ」

「ッ！？」

突然、レナは後ろから薬品のような物をかがされ意識が朦朧となつてしまった。さらにはスタンガンも使用されてしまい、ほぼ彼女は意識を失ってしまった。朦朧とする意識の中、彼女はその場に跪いた。

（し、しまった……………油断しすぎた……………しかもここにいないことは誰にも言っていない……………まずいわね……………）

そう、ここにいることはガルシアやルーク達にも誰にも言っていない。自分の問題の始末は自分で決めようと、秘密にやってきたのだった。

「おやおや、イージスの部隊長も形無しですねこんな簡単に膝を付くなんて。それにしても、ここまで苦労することになるとはいやはや面倒なものですね」

すると自分が優位に立ったと感じたサガミは悠々と語り始めた。

「まあ、イージスの部隊長であるあなたと結ばれれば今後の仕事のほうも御しやすいとふんだんですが、結局このざまとは……………世の中上手くは行かないものですな。せつかく貢いでやったというのに……………好きでもないのに毎日毎日メッセージを送るのもこっちも大変だったんですからね」

ここに来て化けの皮が剥がれたサガミ——彼はレナを利用するために近付き彼女を利用しようと考えていたのだった。そして不適な笑みを浮かべながら近付いていくサガミ。その表情はもはや犯罪者といっても過言ではなかった。

「さてと、これからどうしてあげましょうかね……………」
『おい、今の話本当か……………』
『おや？確かあなたは……………？』

「……………えっ……………だ……………れ……………？」

近付こうとするサガミを止めるように何者かが話しに入ってきた。レナも意識が途切れる前にその人物を確認しておこうと顔をあげるが、顔を確認する前に遂に意識が途切れてしまった。そしてその人物はゆっくりとサガミ達のほうに近付いていく。その様子は、冷ややかな怒りに満ちていた。そして一步一步近付いていき、サガミの目の前でとまった。

「……………答えろ、本当かと聞いてるんだ？」

「……………この際隠してもしょうがないな。だとしたら、どうだというんだ？」

「そうか……………」

その人物はそれだけ答え、しばらく黙っていた。そして改めてサガミの顔を見る、いや睨みつける。その気迫は何者にも勝るものがある。

るようだった。もちろんこれに驚いたのはサガミ達のほうである。
先ほどまでの余裕の表情が打って変わり、蛇に睨まれた蛙のような表情をしいた。そしてその人物はゆっくりとその口を動かし始める。

「ど、どうしたって言うんだ！？ ぼ、僕が誰だか知らないわけ『そんなことはどうでもいい』ッ！？ どうでもいいだと！！ 貴様何様のつもりだ『貴様こそ何様のつもりだ？ 人の心を踏みにじるような行為をしておいて、許されると思うなよ』…………… お、おい…………… なにしようってんだ！？」

そしてとうとう恐怖のあまりサガミは後ずさりして、SPの後ろの方に隠れた。SPの方は少し身構えていつでもサガミを守るようにしている。しかしそれも意味を成さないのだった。それもそのはず、既にその人物は戦闘準備を整え先ほどよりすごい気迫、もとい殺気を出しながら待ち続けていた。

すると

「『ちょっと待った』」

今度は別の方向に顔を向けると、デバイスを構えたガルシアとルークがそこにいた。2人は落ち着いた様子でサガミ達の方に近づき、

レナの様子やサガミの怯えた様子を目にして大方の状況を理解したようだった。

「サガミ・クリスフォードさん、あなたを探していたんですよ」

イージスの隊員2人に言い寄られサガミは思わずしり込みするが、すぐにいつもの様なしゃべり方に戻り何事もなかったように答え始めた。

「いやあ助かりました、この人が僕に言いがかりを『あんたの会社が、不正な取引をしているツツー証拠を手に入れたんでな、ご同行願おうか』ッ!?……………まったく、本当に世の中うまくはいかないものだ……………だが!!『だが何だ?もう、お前に逃げ場がないが』……………え?」

気がつくと、周りにいたSP達はいつの間にか気絶されておりレナも助け出されその人物がサガミの後ろに立っていた。そう、既にサガミは包囲されていたのだった。そしてサガミはとうとう観念して、その場に座り込んだ。

「キョウジ、先に来てたのか?」

「え、ええ……………まあ」

「まあそのおかげで時間も稼げたしこうして見つけることもできたからいつか」

こうして、レナのお見合い騒動？は幕を閉じた。

三人称 s i d e o u t

レナ s i d e

私は目がさめると隊舎の自分の部屋で眠っていた。体を動かしてみてもどこも異常がなく、まるで何事もなかったかのような。でも確かに昨日、気を失わされて……………ってそういえばどうなったのかしら！

私は急いで近くにあったテレビでニュースを入れた。すると、サガミ財閥が摘発され次々と汚職が発覚したとのことだった。まあ薄々は感じていたけど、断って正解ね。私は少しほっとしてベットに座り込んだ。

（でも、そうだとしたらどうして私はこんなところで……………
…？隊舎にいるってことは、ルークかガルシアかしら……………？
まあどちらにせよ、後でちゃんとお礼を言っておかないと）

などと考えていると、私の部屋をノックする音が聞こえた。

「失礼します。部隊長、昨日の段階では異常は見つかりませんでした。が、お体の具合はいかがでしょうか？」

すると意外にもその人物はキョウジ君だった。でも、どうしてキョウジ君が昨日のことをしているのかしら？ ついでに聞いてみましょうか。

「ええ、大丈夫よ。それよりキョウジ君、ちょっと話があるんだけどいいかしら？」

「は、はい……………失礼します。何でしょうか、お話とは？」

「昨日のことなんだけど……………もしかして部屋こまに運んでくれたのはあなた？」

「は、はい！昨日バイゼン隊長シュツルム隊長と共に駆けつけたときには既に部隊長は気絶させられていたため、自分がここまで……………一応医療班に診てもらったのですが、念のため今日も診察をなさった方がよいと思われます」

「ということは、ルークやガルシア達と一緒に来たのね」

「はい、そうです……………何かございましたか？」

ということとは、私が意識を失う前に来てくれたのは……………誰だったのかしら？それにあの声……………どこかで聞いたような。「あの部隊長、自分からも少しよろしいでしょうか……………？」

「何かしら？」

すると今度はキョウジ君の方から話があるようだった。いつもはあまり話さないのに……………突然何の話かしら？いつになく真剣な彼の表情に私は改めて彼の方に目を向けた。

「部隊長……………部隊長は今、幸せですか？」

「えっ……………？」

不意にされた彼の質問に対し私はキョトンとしてしまった。

「いえ、深い意味ではなく……………あの時自分が出すぎたことを言ったせいで彼との交際を断ってしまっただのではないかと……………まあ結果的に彼は逮捕されてしまっただけですが……………彼のような御曹司と結ばれれば玉の輿では？」

なるほど、そういうことだったのね。そのことをどこか引け目に感

じていたのね…………でもキョウジ君のあの時の行動のおかげで
あの時の‘彼’のことを思い出せたんだけど…………

「……………そんなことだったの。そうね……………今幸せか
どうか分からないけど、後悔はしてないわ。そしてこれからどんな
人が来ようとも、私は断るでしょうね……………ある1人を除い
て」

「それって……………あの人……………でしょうか……………？」

「……………さあ／＼？さてと、それじゃあ行きましょうか／＼
！」

「あつ、部隊長ー！」

私は最後の答えをごまかしながらベットから立ち上がり、職場へと
向かっていった。

私の幸せ.....それは

‘もう一度、あの人と一緒の時間^{とき}を過ごすこと、
かな／／.....’

レナ side out

アナザーエピソード1「レナ・C・マリージュ」(後書き)

もしかしたらこの話でだいたいの話が分かってしまう方がいらっしやるかな……………？

そして次回はなのはの話です。
それでは！！

アナザーエピソード2「高町なのは」(前書き)

がんばって一日で仕上げました!!

なので誤字などたくさんあると思いますがどうぞ.....

アナザーエピソード2「高町なのは」

なのは side

光司君が姿を消して早4年、私は機動六課解散後も教導官として日夜教導の仕事に明け暮れています。

けど、1度として光司君のことを忘れた日はありません……………
今どこにいるのかな、光司君……………？

「…………… かん、高町教官？」

「はっ、はい！？」

「どうかされましたか？」

「あっ、ちょっと考え事を。気にしないでキョウジ君」

そうそう、言い忘れてたけど最近私の教導の補佐役として、イージ

スからキヨウジ・天木君が派遣されてきました。何でも、キヨウジ君はまだ年齢が若いから様々な部署を回って経験を増やすようにって言われたらしい……………イージスに入るのも色々と大変なんだね。

「でもすごいよね、その年でイージスに入っちゃうんだから」

「いえ、自分はたまたま……………それに、実力や階級で比べたら高町教官の方が上です」

「にははは、そう言われちゃうと照れちゃうね」

そして私たちは話しながら歩いていき教導を行う場所へと到着した。ついでに言うと、キヨウジ君は今日が初めての勤務の日で、みんなキヨウジ君の方を見てヒソヒソと喋っていた。まあ無理もないよね、イージスの隊員さん達は制服ですぐ分かったちゃうから。

教導官の私は白を基調とした服装に対し、キヨウジ君の服装は赤を基調としている。これは、前に1度光司君がイージスの制服を着ているときに話していたことなんだけど、どうやら僕のバリアジャケツトの紅をイメージして作ったらしいですよ、と言っていた。

「えー、皆さん見て分かると思うんですが、今日からイージスの部隊員からキヨウジ・天木二等空尉が着てくれました。天木二等空尉には私の補佐役として私の教導も手伝ってもらいます」

「ご紹介にあがりました、キョウジ・天木です。本来ならまだ自分も教わる立場ですが、少しでも皆さんの役に立てたらと思います。それでは、よろしく願います」

「『『『『』』』』』よろしく願います』』』」

軽い挨拶を済ませ、私たちは早速教導に入ることにした。最初は心配したけど、キョウジ君は丁寧に教えていた。この調子なら、少し任せても大丈夫かな……と思ったその時だった。突然こんな話が出てきた。

「あの、天木二等空尉はどれくらい強いんですか？」

「え……どれくらい……といわれても……？ いまいち見当がつかないですね……」

「うーん、それじゃあいい機会だし私とキョウジ君の模擬戦でも見てもらおうかな」

「えっ！？ 模擬戦ですか！？」

突然の提案にやっぱり驚くキョウジ君。まあ無理にとは言わないけど………周りの目が期待してるからね。キョウジ君の周りには模擬戦を期待している皆が集まってきた。キョウジ君の方もなん

だか断りにくそうな表情してるし……たぶんこれは……

「……………分かりました。高町教官さえよろしければ……」

「決まりだね。それじゃあみんな少し離れてて、今から模擬戦をやるよ」

結局、教導を一時中断し私とキョウジ君との模擬戦を見せることになった。

なのはsideout

三人称 side

キョウジとなのはの模擬戦が決まり、観客がざわめく中その2人が向きあっているのはホログラムで作った廃墟。そしてお互いにバリアジャケットを展開させて戦闘の準備をし始めている。キョウジのバリアジャケットは赤いロングコートに黒いズボン、そして赤のラインが入った黒いシャツとネクタイ姿だった。またその両手にはデバイスである二つの銃が握られていた。その銃はリボルバー式でカラーリングは一方が黒、もう一方が赤を基調としていた。

「それがキョウジ君のデバイス………？」

「ええ、これが自分のデバイス‘ベレンヘーナ’です」

《Nice to meet you . (よろしくおねがいします)》

そしてしばしの沈黙の後

「……………それじゃ……………レディー……………ゴーーー!!」

そしてなのは合図で模擬戦が始まり、一気に戦闘モードになった。
先手を打ったのは、以外にもキョウジの方だった。

「ッ!? レイジングハート!!」

《Acceler shooter》

なのはは咄嗟にアクセルシューターを放ちキョウジの放った魔力弾を相殺させる。と同時に黒い爆煙が広がり2人の視界を遮った……
……が、すぐに2人は空中に上がり同時に相手の方を見た。

「……………さすがですね」

「……………いきなりだったけど、たぶんくると思ってたからね。反応には困らなかったよ。でも、今度はこっちからいくよ!!」

今度はなのはの方が魔力弾を整形しキョウジを攻撃した。キョウジはあせることなく飛行しながら旋回したのはの魔力弾をよけていく……
……………そしてその様子をしっかりと目に焼き付けていく訓練生達。目で見えて出来るとは言えない動きではあるが、その動きはどこ

かひきつけるものがあつた。

「やっぱり簡単には当たらないね……………それなら!!」

《Load cartridge》

薬莢が発射されレイジングハートに桃色の魔力が集中していく。そしてその光はだんだんと収縮し、レイジングハートの先端部分に集まっていく。

「ッ!?さすがにあれはまずいか……………ベレン!」

《All right》

そして避けながら両方の銃から一発ずつカートリッジをロードし、こちらも魔力を集中させていく。

「デイベイン……………バスター……!!」

「イレイズ……………バスター……!!」

そして2人の収束砲が同時に発射されそして相殺される。そして先

ほどより大きな爆発が起こり爆発による爆煙があたりに立ち込める。しばらくの沈黙の後、だんだんと煙が晴れ2人の姿が見えてくる。なのはの方は無傷だが、キョウジの方は先ほど発射したときなのはの魔力弾が当たり少しバリアジャケットがこげている。

「……………避けきったと思ったんですが……………やはりそう上手くはいきませんか」

「まさかカートリッジをロードしたデイベインバスターを相殺されるなんて……………キョウジ君もさすがだね」

なのはもキョウジも互いの強さに感銘し、互いに褒めていた。そして2人はここで終わるなどと到底考えていなく、再び自らのデバイスを握り締め再び膠着状態になる……………そして

「……………ロードカートリッジ!」

均衡を破ったのはキョウジの方で、再びカートリッジをロードしたのはに攻撃をしかけるようだ。なのはの方も攻撃がくると思い、咄嗟にシールドを展開する。そしてその判断は正しかったとなのは自身が実を持つて分かることとなる。

「……………ショットバレル!!」

「ッ!？」

突然キョウジの双銃から無数の弾が発射されなのはを襲った。これは双銃からショットガンのように散弾型式で魔力弾を発射する技で、さらに引き金を引き続けることでショットガンとは違い連発が可能な攻撃である。そしてキョウジは引き金を引き続け、なのはの周りは土煙で覆われた。

(不味い……………これじゃあキョウジ君の姿が見えない……………)

なのはの方はキョウジのショットバレルの攻撃を防いだものの、散弾による攻撃でなのは以外の所にも攻撃が当たり土煙が飛び交っていた。

そしてしばらくして、キョウジの攻撃が止み辺りは一転して静けさが支配した。

(さてと……………どこから来るかな……………?)

なのははおそらく奇襲が来ると考え、回りに幾つかのスフィアを配しキョウジを待った。

そして勝負の瞬間はすぐそこに迫っていた。

「はあああつ！！！！」

「ッ！？」

なのはの左45度の方向から黒煙を貫きキョウジが銃に魔力刃を付け強襲をかけてきた。なのはの方も反射的にキョウジに反応し、スフィアを数個発射した。

「『ッ！！！！！』」

瞬間的に時間が止まったようだった。キョウジはなのはの放ったスフィアをぎりぎりのところで避けなのはに剣先を突き立て、なのはの方もレイジングハートを向けさらに残ったスフィアをキョウジにぎりぎりのところで止めていた。そう、この状態で2人は硬直していたのだ。

「……………どうやらこの勝負……………」

「……………引き分けっばいかな……………」

お互いに1歩下がり、お互いにデバイスをリリースさせる。周りからは「おおー!!」や「さすがです!!」など大きな歓声が上がりにわかに活気付いていた。

かくして、キョウジVSなのはの模擬戦は終結した。

そして時間はたって時刻は夕刻。なのはが明日の教導のため訓練場に向かうと、そこには先客がいた。

「あれは……………キョウジ君……………」

そこには訓練場でキョウジが訓練していた。なのは気付かれまいとはこっそりと物陰に隠れ、そっとキョウジの様子を見ていた……………しかし、見ていたキョウジはピクリとも動かなかった。そしてしばらくすると……………

「ッ……!!」

一瞬のうちに腰のベレンヘーナを引き抜き数十メートル先のターゲットを打ち抜いた。そして打ち抜いたことを確認するとベレンヘーナを腰に戻したため息をつく。

（さすがあの年でイージスに入っただけのことはあるね……………）

と影ながらなのはが感心していると

「高町教官……………盗み見とはあんまり関心できませんね……………」

「（ギクッ！）」

キョウジは振り返ることなく、まるで知っていたかのようにその場でなのはが隠れていたことを言い当てた。そしてこの時、なのはは思い出していた。

それは4年前、神谷光司がまだ機動六課にいた頃彼もキョウジと同じように訓練が終わったあと、訓練場で1人自主訓練をしていた。そして同じようになのははその様子を影からひそかに見ていたところ、光司はキョウジとまったく同じ言葉でなのはを注意したのだった。

（そう言えば……………光司君にも同じこと言われたっけな……………）

「?気のせいだったか……………」

キョウジはなのは出てこないことを不安に思ったのか、それとも当
てずっぽだったのかそんなことを呟いていた。

(よし……………気が付かれないうちに行こうかな……………)

なのはは好機とばかりにキョウジに気が付かれないうちに自分の部
屋へと戻っていった。

「……………こんな感じ、でいいかな。さて、もう少しやる
か……………」

キョウジがなのはが行った後こんなことを行っていた事など、なの
はは思いもしなかったのだった。

そしてさらに時間は経過し翌日。今日は昨日の模擬戦を生かし訓練

に立ち、冷やかな目で見つめていた。その瞳に生氣はなく、ただ見つめていた。

「……………う、うるさい！！これで俺の力がどれほどか教官に分かるはずだ！！そうすればそのうちあんたのようにイージスに『言いたいことはそれだけか……………？』……………な、何なんだよ！？」

「……………そうか……………」

それだけ言つと、キョウジはその場から突然消え去り倒れている訓令生を抱きかかえ、一瞬でなのはの所まで行きその子をなのはに託しこれまた一瞬で相手の所へと戻ってきた。その間、周りの人間は呆氣にとられキョウジの行動を見ていた。

「だったら、俺が相手をしてやる。俺は指一本しか使わない……………
……………それで前が勝つたら、お前を認めてやろう」

手を前に出し人差し指を相手の方に突き出し挑発するかのように見せ付けた。今のキョウジは目の前の相手しか目に入っておらず、眼前の相手^{てき}を打ち倒すことしか頭にない。なのはも、もし不味い展開になるうものならいつでも出られるようレイジングハートを握り締めていた。

「指一本！？なめられたもんだな！！後悔するなよその台詞！！」

相手の方は、キョウジに勝てば憧れのイージスに入れると思い余計に気合が入る。そして動かずに、杖を構え収束砲を撃つ準備をする。

「昨日の模擬戦で誘導弾は当たりにくいって分かってるからな。こうなったら力技であんたに一発入れさせてもらう!!」

「……………やれやれ……………その程度の収束砲で太刀打ちしようとは……………ベレン」

《Of course . It is already completed . (もちろん、既に完了しています)》

キョウジはセットアップもせずベレンヘーナを一丁だけ構え引き金に手をかける。そう、キョウジは‘人差し指’ただ一本で決着^{けり}を付ける気なのだ。

そして……………

「……………シューーーーーーッ!!!!」

「……………シュート……………」

2人の攻撃が同士に発射されぶつかり合う。一時は均衡していると思いきや、それは一瞬のことだった。キョウジの放った一筋の光が収束砲を貫き相手に直撃した。何が起ったかも分からずにその場

に倒れこむ訓練生………そしてすぐに肩を貸し先ほどと同じようになのは所へと戻ってきたキョウジ。彼は訓練生をなのはに渡すとき去り際にこう言っただけだった。

「こいつは、少々間違った道に行こうとしてたんで軌道修正しておきました。これから、高町教官がこいつを正しい道に案内してあげてください。それが、‘教え導くもの’である教官の勤めですよ。それでは、自分はこれで………」

そう言い残し、キョウジはその場から去っていった。

三人称 s i d e o u t

なのは s i d e

あの後、私は模擬戦をした2人にあの時のティアナと同じような話をした。特にあの子は私の話を食い入るように聞いてくれてくれた。そして一言、私と倒した相手の子に『ごめんなさい』といった。その子はキョウジ君にも謝りたかったみたいだけど、探してもどこにもいなかったの………おっかしいな？

「キョウジ君……… いったいどこに? …… あ、いたっ!」

私は隊舎を探し回って、やっとのことで屋上で空を見上げているキョウジ君を発見した。でも、その様子はどこか寂しそうな表情だった。

「キョウジ君!! こんなところにいた!!」

「高町……… 教官………」

キョウジ君は私に気が付くとその寂しそうな表情を私に向けた。

「出来れば……… このまま誰にも知られずに行きたかったので
すが………」

「? どういうこと?」

話によると、前も話してくれたようにキョウジ君は色々な部署を回らなければならずしかもその期間が短期間のため1つの部門にける時間が極めて短いらしい。そんな訳で明日には別の部署に行ってしまうとのことだった。キョウジ君は私にこのことを内緒にして、明日こっそりと出て行くつもりだったらしい。

「まったく、そういうことなら早く言ってよね」

「す、すみません……………」

「まあ、短い間だったけどキョウジ君とやれてよかったよ」

「はい、自分もです……………」

「また、会えるといいね」

「ええ……………きっと会えますよ、きっと……………」

するとキョウジ君はなにやら意味深な微笑を浮かべながら答えた。
その顔は何かしらの自信がありげな顔だったけど、私にはそれがさ
っぱり分からなかった。‘ きっと会える ’……………そう言ってく
れるのはうれしいけど、何なのかな……………？

そうして私は頭に？マークを浮かべたまま部屋へと戻っていった。

なのはsideout

三人称side

なのはが去った後も、キョウジは1人夜空を見上げていた。 12月

の冷たい風が彼に吹きすさぐが、彼はお構いなしの表情を浮かべていた。

「今日は12月9日、例の日まであと二週間とちょっとか……
早くしないとな………」

誰にも聞かれないように、キョウジは1人そう呟くのであった。

三人称 side out

アナザーエピソード2「高町なのは」(後書き)

今回はフェイトの回です!!

書いてると、これどこまで書く……って思っちゃってますが、私だけでしょうか………?

それでは次回もがんばります!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0341ba/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～紅蓮の騎士伝説～

2012年1月9日22時00分発行